

ミルクプリンセス2

もっとラブラブにゆ〜トピア

立ち読み版

小説 神崎美宙
挿絵 大空樹





登場人物紹介

Characters

アキラのために、
ミルクを搾ってあげますわっ……。



ローズマリー＝
アンジェリカ＝
ガトーマリティエ

ステラと同じく、アキラの手で助けられたお姫様。ステラの妹で、アキラに感謝しつつも高飛車な性格のせいで素直になれない。Gカップ。

私だってアキラさんと
もっとなイチヤイチャしたいです。



ステラ＝リリイ＝
ガトーマリティエ

敵国に囚われていたところをアキラに助けってもらったお姫様。物静かで礼儀正しい性格で、助けてくれたアキラに恋心を抱いている。Cカップ。



今日はわたしに
ご奉仕させてください……！

シュリス

クリスティナに仕えるメイド長。仕事のできるクールビューティ。英雄となったアキラに対して、身体を使って奉仕する。Dカップ。

アキラ＝リョウ

軍事大国ソドムで牢屋番をしていた少年。現在はクレーージュに亡命し、王宮で暮らしている。



わらわのミルクが
いいかしら？

クリスティナ＝ トレイジア＝ ガトーマリティエ

ステラとローズマリーの母親にして、クレーージュ王国を治める女王。母性的な女性で、娘を助けてくれたアキラを自慢の爆乳からあふれるミルクでもてなす。Iカップ。

序章	
第一章	優雅な一日
第二章	お姫様の誘惑
第三章	一味違うミルクティー
第四章	長い夜
第五章	美人メイドのご奉仕
第六章	もっとラブラブにゆ〜トピア
終章	
	250
	198
	159
	118
	081
	047
	012
	007

「僕も、ステラ様ともつとイチャイチャしたいですよ……」

「……でしたら、今度はアキラさんから……お願いします……」

そう言うのとステラは顎を少し反らして目を閉じる。すぐにもう一度少女の口をふさぎ今度は舌を差し出すと、王女も舌を絡ませ激しい接吻を受け止めてくれた。

「んっ……ちゅ、ちゅぷ……はぁ、あぁ……アキラさぁん……」

首に回っている細い腕に力を込めて嬉しそうに微笑むステラを抱きしめ返し、呼吸することすら忘れてその甘い唇を食った。キスをしているとまるで心が繋がっているような感覚を覚え、欲情とは別に温かい気持ちで胸を満たしていく。

「……ぷはぁ……はぁはぁ、ふふ……」

顔を離すと今度は照れたように微笑みを浮かべた王女と目が合う。お互いの息遣いを直に感じるができるほどの至近距離で見つめあっているうちに、どちらからともなく再び唇を重ねあった。

王女の可愛さとキスですっかり興奮してしまい、胸の鼓動は激しくなる。

「ねえ、アキラさん……あの、喉……渴いていませんか……?」

頬を上気させた王女が不意に口付けを中断して話しかけてきた。

「……喉ですか? それは、渴いていないことはないですけど……」

先ほどまで踊りの練習をしていたから喉が渴いているかと言われれば渴いている。しか

し今はそんなことより、彼女の唇をもつと味わっていたかった。

なぜ突然そんなことを言い出したのか分からず首を傾げていると、ステラはさらに顔を真っ赤に染めながらドレスの胸元に手をかける。

「あ、あの……でしたら、ミルクはいかがですか……？」

ドレスの胸布がずらされ、純白のブラジャーに包まれた美乳が目の前に晒された。

実はステラが射乳を迎えたのはつい最近のことである。この国では本当に大切な人を最大限にもてなすにはミルクを飲ませる風習があり、ミルクが出ないと大人の女性と認められず結婚できない掟があるくらいだ。

出会ってすぐの頃はまだステラはミルクが出なかった。そのコンプレックスはもちろん、恩人である少年を自らのミルクでもてなせないのが何より悔しかったに違いない。

そんな彼女もアキラとのエッチの最中に性的な刺激のおかげか無事に射乳を迎え、今ではこうやって積極的にミルクでもてなしてくれるようになっていた。

「私のミルク……アキラさんに飲んでいただきたいです……」

カップに注ぐのではなく直接ミルクを飲ませるといふことは、この国でも本当に愛しい人にしか許さない行為だ。

「はい、ステラ様のミルク……いただきます……」

王女の純粹すぎる気持ちが嬉しくて少年は何度も頷いた。

「あ、あんっ……」

両手を胸に添えた瞬間に華奢な身体がビクンツと跳ねる。その反応の初々しさに感動しつつ、少年の方も胸が痛いほど心臓の鼓動は大きくなっていた。クリステイナに毎晩のようにベッドで甘えているが、同世代の異性相手となると違った緊張感がある。

「ステラ様のおっぱい、とても綺麗です……」

「ひゃんっ……は、恥ずかしいですから、そんなにジッと見ないください……」

ブラのカップを引き下ろすと王女はさらに頬を赤らめ腰をくねらせる。

淡い薄ピンク色をした乳輪も乳首も小さく、まだ大人の女性として変貌を遂げる直前の蕾のような乳房だった。母親と比べるとサイズこそ控えめだが、それでも年齢相応に育った綺麗な形をしたお姫様のおっぱいに少年の視線は釘付けにされる。

「はあ、んっ！　ん、んっ、ふあ……ア、アキラさん……」

手のひらにすっぽりと収まる美乳を持ち上げるように揉みしだきながら、可愛らしい先端にむしゃぶりついた。

「そんなに強く吸われたら、あ、あんっ……」

胸を揉み舌先で乳首を転がすと、甘い嬌声が瑞々しい唇から漏れる。必死に手で口元を押さえて必死に声を我慢しようとしている姿がまた可愛くて、アキラはお姫様のおっぱいを夢中になつて揉み乳首を吸った。

柔らかくて指に吸いつくように肌はモチモチで柔らかいおっぱいとは対照的に、先端は口の中でどんだん硬く尖っていく。

「ひいあっ……胸が、ジンジン痺れて……ミルクが出ちやいますっ……」

もう声を抑えるのは諦めたのかステラは腕を伸ばし、離れたくないと言わんばかりに力を込めて少年の頭をギュッと抱きしめた。縋りつくように必死に身体を密着させる王女の姿が男の保護欲をかき立てる。

クリスティナのおっぱいにしゃぶりついて甘えている時とは違う興奮が胸を高鳴らせ、乳房を揉む手にさらに力が入った。

「んっ、ステラ様……ミルクが……」

ぷっくりと膨らんだ乳輪ごと乳首を吸い上げると、不意に口内に甘い味が広がる。

反対の乳房にもしゃぶりつくと同じようにミルクが滲んできた。心なしか乳房全体が少し張ってきた気がする。

「ああ……アキラさんにミルク飲んでもらって……私、とつても嬉しいですっ……」

室内に王女の甘い声と熱を帯びた吐息が響く。恥ずかしそうに顔を真っ赤にしているのに、胸を吸われると幸せそうに微笑んでいるステラが堪らなく愛しい。

母親のように揉めば揉むほど大量に溢れてくるというわけではないが、乳房に指を食い込ませるたびに先端からびゅるびゅるとミルクが噴き出してくる。

「どうですか……ンふう……喉の渴きは、治まりましたか……？」

確かに喉は潤ったが、その代わりに別の部分が渴望していた。

「えっと、そうですね……」

すっかりズボンの股間は膨らみ、下になっている王女の太股にグリグリと押しつけてしまっている。ステラもそのことには気づいていたに違いない。少年が言葉を濁すと、ハッと口元を手のひらで押さえながら視線を泳がせた。

「あ、あの……」

胸にしゃぶりついているため、彼女の動揺がおもしろいくらいに伝わってくる。鼓動の変化はすぐに分かった。

恥ずかしそうにモジモジとしていたステラだったが、意を決したように口を開く。

「アキラさんさえよければ、なんですけど……私の胸を……使ってください……」

「ええっ!？」

あの清楚で可憐なお姫様の思わぬ発言に、少年は我が耳を疑った。

「その、私の胸で……大きくしてください……? でしたら私の胸で、気持ちよくなってください……」

王女は両手で自らの美乳を左右から挟み中央に寄せ上げ胸の谷間を作る。綺麗な形をした乳肉がギュッと押し寄せられ、乳首には白いミルクが滲んでいた。

「そ、そんな……え、えっと……」

長いストレートの金髪を床にばらまき、王国一の美少女と噂されるお姫様がおっぱいを寄せながらジッと見つめてくる。普段の上品な物腰とのギャップもあり、その誘惑に少年の心は一瞬で驚掴みにされていた。

しかしこのままでは王女を跨いで胸に逸物をねじ込むことになる。それは不敬すぎるのではと待ったをかける理性と、美少女の新鮮な体位でのパイズリを味わいたいという欲望が脳内で葛藤を繰り返す。

「私ではダメですか？ お母様やマリーのように大きくないですけど、精いっぱいご奉仕しますから……」

少年が躊躇ためらっているのとステラの表情は曇っていく。自分に好意を寄せる美少女の悲しそうな顔を見た瞬間に思わず叫んでしまっていた。

「そんな、ダメなはずがありません！ 僕、ステラ様のおっぱい大好きですっ!!」

大急ぎでズボンと下着を脱ぎ捨て、勃起したペニスを取り出したアキラは王女の華奢な身体に跨がる。そして逸物を胸の谷間へと押し込んだ。

「きゃっ！ あ、熱いですっ……私の胸の間で、ビクビクッて震えています……」

驚いたように可愛らしい悲鳴を上げるが、王女はしっかりと両手で美乳を中央に寄せてペニスに押しつけてくる。クリスティナのようにペニス全体を包み込んでしまうような大

迫力のパイズリとは違うが、瑞々しくスベスベの乳肌の心地よさは母親にだって負けていない。それに誘惑を仕掛けてきたのに少し不安そうに見つめてくる初々しさや、健気で一生懸命な姿が男心をくすぐる。

「……動いてもいいですか？」

「は、はい……アキラさんのお好きなように……」

王女が頷いてくれたので、まるで膣に挿入するような要領で腰を前後に揺らすと、柔らかい乳肉と擦れあい肉棒が蕩けそうなほどの快感が股間に広がった。しかもミルクで乳肌が濡れているおかげで、初めての体勢なのにスムーズに乳摩擦を繰り返す。

「うっ、これは……すごく、気持ちいいです……」

パイズリと言えば女性が動いてくれるものだと思っていた。こうやって自分が腰を振って胸に肉棒を押しつけていると、まさにおっぱいを味わっているという普段とは違う満足感が胸を満たしていく。

「んっ、んんっ……ほ、本当ですか……？ アキラさんに喜んでもらえたのなら……とても、嬉しいです……」

好き放題に勃起ペニスを擦りつけられているのに、王女は健気に微笑みながら肘を張って乳房を押さえつけて谷間を維持している。

その姿に興奮した少年はさらに強く肉棒を乳房の間にねじ込んだ。

「あつ……あ、あんっ、激しいですつ……胸の中から出たり、入ったりして……はあん、すぐく擦れて、ヤケドしちゃうそうですつ……」

先端からは我慢汁が溢れミルクと混ざって谷間に溜まり、ピストンをするたびにズチャズチャと淫らに水音が響く。

緊張からか身を硬くしていたステラだったが、自分の胸に擦りつけられているペニスを興味深そうにジツと見つめている。それに少しずつではあるが、彼女の口からこぼれる声が熱を帯びていく。

「あん、ああんっ……胸が熱くて……ミルクが出ちゃいますつ……はあん、は、恥ずかしいっ……でも、気持ちいい、いいんっ……」

乳房を擦られるだけで感じているらしく、身悶えしている美少女の姿に興奮はますます高まっていた。調子に乗ってさらに強くペニスをおっぱいに押しつけ続ける。

「あの、ステラ様っ……お願いが……」

射精欲が股間の奥で燻り始め、もつと快感を味わいたくて思わず口走りそうになった言葉を呑み込んだ。

「……はい、何ででしょうか？」

突然こんなことを頼んでいいものかと口ごもっていたが、ステラはなぜか嬉しそうに瞳を輝かせながらこちらを見つめてくる。これで何でもないと言葉を濁したら、逆にまた王

女を悲しませてしまうと感じた少年は恐る恐る口を開いた。

「えっと……本当に、よかつたらでいいんですけど……先っぽを、その、舐めてもらえませんか……？ 嫌なら大丈夫なので……」

「舐めればいいんですか……？ こんな感じ、でしょうか……ンちゅ……」

無垢なお姫様は言われた通り少し顎を引いて舌を伸ばし、胸の谷間から伸びるペニスの先端をペロリと舐めする。

「はうっ！」

ザラつく舌先の刺激が股間に走り、思わず射精しそうになった。あまりの反応が良すぎたせいも、ステラは驚いたように慌てて舌を引っ込める。

「ご、ごめんなさい……痛かったですか……？」

「いえ、そうじゃなくて気持ちよすぎて……今みたいな感じでお願いできますか？」

「そうだったんですか……それでは……」

少年が喜んでいたことを知った王女は安堵のため息をつく。

そして今度はこちらの反応を窺うように上目遣いに見つめながら、おずおずと舌先で亀頭を突っついてくる。

（うあっ！ ステラ様可愛すぎる！）

エッチなお願ひも嫌な顔をするどころか、むしろ喜んで聞いてくれるステラの健気さに



牡欲を刺激されたアキラはさらに激しく腰を振った。

「ア、アキラさん……ンちゅ、ちゅぶっ……」

乳房の間を出入りするペニスの先端からは透明な我慢汁が溢れている。それをステラは必死に舌を伸ばして舐め取りながら、むにゅむにゅと形を変えるおっぱいを抱えペニスに擦りつけてくれた。

「ああ！ で、出そうですっ!!」

このまま射精したら王女の顔にかかってしまう。お姫様に顔射なんて不敬の極みだというのに、腰の動きは止まらない。それどころかステラなら受け止めてくれるのではという淡い期待が胸を支配する。

「ちゅぶ、ううん……は、はいっ、いつでもお好きな時に出してください……」

「でも、ステラ様のお顔にかかってしまいます！」

あれこれ悩んでいるうちにどんどんと限界は近づいてきていた。

「そんなこと、お気になさらずに……はぁんっ……ちゅ、ぴちゅっ、ちろちろっ……」

王女は顔を背けるどころか、むしろ射精を催促するかのように鈴口を舌先で刺激してくる。ミルク乳摩擦の快感も加わり、一気に絶頂へと駆け上がっていった。

「うああっ……出ます、イキます！ ステラ様、申し訳……うああああっ!!」

爆発寸前のペニスを思いつきりおっぱいにねじ込む。

谷間から顔を覗かせた龟头が王女の口元に急接近し、逸物が大きく脈打った。

ドビュ！ ビュ、ビュルツ……ビュブブ、ビュツ、ビュビュビュツ！！

「きゃっ……」

大きく目を見開いたステラの顔に容赦なく糸を引く精液が飛び散り、無遠慮に白化粧を施していった。

美しい顔を自分の精液で汚すことで独占欲が満たされていく。身勝手な快感に浸っている間も、ステラはずっと舌を伸ばし必死に口を開けて白濁液を受け止め続けてくれた。「すごい……ン、んっ、コクっ……こんなにいっぱい……嬉しいです……」

王女は口内に飛び散った精液を嚙下し、顔に付着した分を指で拭って不思議そうに眺めながら舐め取っている。

「わわ！ ステラ様、舐めなくても……」

「そこまでしなくてもと慌てて止めるが、ステラは気にした様子もなく口の中の精液を嚙下した。

「そうなんですか……？ 申し訳ございません……アキラさんが感じてくださった証だと思おうと嬉しくなつて、つい……」

「いえ、別に謝らなくても……むしろ嬉しいですから……でも苦くないですか？」

「アキラさんのですから、苦くなんてありません」

いくら女性慣れしていなかったアキラとは言え、ローズマリーのおねだりに気づかないはずはない。

ただ嬉しさと恥ずかしさで、つい無粋な言葉が口から出てしまった。

「……もうっ！ 意地悪なこと言わないで欲しいですわ……妻が夫にお願いすると言ったら……その、決まっているでしょうっ……」

想いが伝わっていないと思ったのか、王女は顔を真っ赤にしなが頬を膨らませる。

その怒っているようで本当は拗ねている表情もまた可愛くて、思いつきり抱きしめたい衝動に駆られた。

ふと気づけばシェリスの姿が見えない。テーブルの上も片付けられており、二人がキスに耽っている間にこうなることを察して席を外してくれたようだ。しかし、さすが仕事のできる大人の美女だと感心している場合ではない。

「まだ分からないんですの……？ ま、まさか……わたくしをからかっているわけではありませぬわよねっ……」

あまりにも少年の反応が鈍いせいで王女は不満げにジト目を向けてくる。

「そ、そういうわけではないですよ……ローズマリー様が、とても可愛すぎて固まってしまったといえますか……はい……」

「え……そ、そうだったんですの……」

可愛いという言葉に反応し、王女の赤かった頬がさらに真っ赤に染まっていく。クリステイナだったら口がお上手ねと軽く流してしまうだろうけど、妹姫はいちいち真に受けてコロコロを表情が変わる。

普段は大人びた雰囲気を漂わせているが、こういう初々しくて可愛らしいところは年頃の町娘と何も違いはない。

「ローズマリー様……僕も、もう……」

「……ええ、このまま……わたくしと……」

王女は両手を少年の股間へと伸ばし、ズボンと下着を脱がせ、乳搾りとキスですつかり勃起している逸物を取り出した。一瞬息を呑んで固まった王女だったが、平静を装いながら腰を浮かせスカートの中へと手を忍ばせる。

そしてショーツをずらすとそのまま腰を下ろそうとしてきた。

「いきなりで大丈夫ですか?」

「大丈夫も何も……誰かさんが焦らすせいで、もう我慢できないんですのっ……」

慌ててストップをかけたが、王女は照れ隠しなのかプイッと視線を逸らしてしまう。

しかし王女はすぐに向き直りいきり勃つペニスを片手で固定し、自らの秘裂へと導き狙いを定めた。

「ひ、あぁんっ!」

くちゅっ——。花弁と触れあう粘着質な音と共に、先端が生温かく濡れた肉ピラに包まれる感触が股間を貫いた。

「わっ……すぐ濡れてますね……」

「う、うるさいですわ！ 黙ってわたくしを感じていればいいんですのっ……」

胸を揉まれミルクを搾られ、激しい接吻で気分の高まったローズマリーの女性器はすでにびしょ濡れで準備万端、愛しの少年を欲して涎を垂らしている状態である。

それを指摘された王女は頬をさらに赤く染めながらも、じわじわと腰を落としていくと膣肉は少しずつペニスを呑み込んでいった。

「あ、あぁっ！ 熱いつ……はぁ、ンんっ……」

ズブ、ズニユツ……ズリュ、ズニユウウっ！

姉よりも膣内は柔らかく肉ヒダは多いが、それでも十分に締めつけはキツい。

「うう……き、気持ちいいですっ……」

亀頭先端が膣奥に達し座位で貫かれたローズマリーは黄金の巻き毛を揺らして大きく仰け反った。

「はぁン！ アキラでわたくしの中がいつぱいになってますわ……」

はだけたドレスの胸元からむき出しになっている生おっぱいがぶるぶると弾み、乳首からはミルクが滲む。挿入しただけで気持ちよすぎteお互い動けなくなり、しばし抱きあつ

たまま見つめあう。

「アキラあ……ンっ、ンう……ちゅ、ちゅうう〜」

どちらからともなく顔を近づけ唇を重ね、舌を貪り唾液を交換する。先ほどとは違い挿入しながらのディープキスはさらに一体感が強く、全身で相手の存在を感じる密着感が堪らなく心地よかった。

「……ぶはっ……どうしたんですか、今日はやけに甘えん坊ですね？」

「べ、別にそういうわけではありませんわっ！ ただアキラはこういうのが好きだと思っただから、してあげてるだけですわ……」

急に早口でまくしたて、フンツと鼻を鳴らすお姫様。相変わらず素直に感情を表現するのが苦手で、強がってしまう姿も愛情の裏返しだと知っているから可愛くて仕方がない。

キスで返事をする、ローズマリーはそれはもう耳まで赤くしながら腰を揺らめかせ、必死に口元を引き締め恥ずかしさを誤魔化そうとしていた。

「何をしているんですの？ はンっ……す、好きに、動いていいんですよ……」

「いや、この体勢だと僕はあまり動けないので……」

ソファに腰掛け膝の上に少女を乗せているこの体位では、下になっている方の動きはかなり制限される。それこそ相手を抱え上げるくらいのつもりで腰を突き上げるなら話は別だが、こんな体位で挿入した経験があまりないアキラには敷居が高く、またそういう発想

すらなかつた。

「まさかわたくしに、この格好で……こ、腰を振れと言うんですの？ そんなはしたないこと……うう、しかし……」

体勢を入れ替えれば済むのだが、王女はあわあ言いながら視線を泳がせている。

こちらもつい数ヶ月前まで処女だったお姫様だ。勢いで挿入まで果たしたものの、男に跨がり自ら腰を振ることにやはり抵抗があるのだろう。

「ローズマリー様、でしたら……」

「わ、分かりましたわっ！」

少年の言葉を打ち消し、意を決したようにローズマリーが叫んだ。

「ン、はあ……アキラがして欲しいなら、特別にしてあげますわっ……」

王女は肩に手を回してバランスを取りながら左右の足を立ててM字に開き、ゆつくりと腰を上下に揺らし始める。それでもやはり慣れていないせいかわたはガクガクと震え、腰の動きはあまりにぎこちない。

「うっ……ローズマリー様、無理はしなくても……」

「無理ではありませんわ！ はぁン、あぁっ……これくらい、わたくしだって……」

見かねた少年が声をかけると、意地っ張りなお姫様はムキになって腰を揺らめかせ続けた。柔らかくて細かい肉ヒダが連なる膣肉でペニスが扱かれ、密着する粘膜同士が軽く擦

れるだけで甘美な痺れが股間に広がる。

目の前で発育過多気味な乳房がぷるぷると弾み、必死に気持ちよくしようとしてくれる姿に興奮を誘われた。

「あ、あんっ……深いっ……奥に当たっていますわっ……」

この体勢だと自然とペニスは膣奥に突き刺さり亀頭は子宮口に達する。快感が強すぎるのかローズマリーの動きは鈍く、まるで弱火で炙られているような感覚の腰使いだっただ。

「僕も……動きますねっ……」

「ちよ、ちよつとアキラ……？ きゃん！ はあ、ああんっ……」

焦れつたくなった少年は細い腰を両手で捕まえ下から突き上げる。王女が腰を上下に揺らしているおかげで、少し動きやすくなっていた。ただでさえ深い結合の快感に悶えていた王女は、突然の責めを受けて甲高い悲鳴を響かせる。

「ああん！ そんな、いきなり……あ、あふうんっ……ダメですわあっ……」

突き上げの反動で王女の身体は大きく跳ね、太陽のように輝く長い金髪が躍った。自慢の爆乳は先端に滲んだミルクを撒き散らしながら先ほどよりさらに大きく揺れる。

「ああ、気持ちいいですっ……」

悶えるローズマリーの姿に胸は高鳴り、一度動き出した腰は止まらない。

「いやあ、ああっ……ダメですわ、ダメ……あ、あん、ああんっ！」

ダメダメと言いながら首を左右に振る王女だったが、結合部からは大量の愛液が溢れてピストンのたびにグチュグチュと淫らな水音を響かせていた。

「すみません、ちよつと……もう止められないですつ……」

以前のアキラだったら心配してすぐに腰を止めてしまったに違いない。多少経験を積んだことで今は本気で嫌がっているわけではないことが分かるようになっていた。

「あ、ひあつ！ は、激しい、激しすぎですわつ……ん、ああつ、ひいんつ……」

恐る恐る腰を動かしていたローズマリだが、下から突き上げられてからはもう完全にされるがままになっている。バランスを失い必死に少年の身体に抱きつき、二人の間で押しつぶされた爆乳からミルクが溢れて互いの衣服を濡らした。

（ああ、もう出そうだつ……）

自ら動くことでより強く肉棒と熱く濡れた粘膜が激しく擦れあい、股間が蕩けてしまいそうな感覚を覚える。

グツチュツ！ ズチャ！ ズツチャツ！ ズチャズチャツ！！

「はあん、はあん、もうダメですわつ……も、もう、わたくし……アキラでいっぱいになつてしまつて……ンああ、はあつ……」

汗で金糸が額やうなじに張りつき、少女らしからぬ艶っぽい色香を漂わせるローズマリ一の喘ぎ声もどんどんと色味を帯びていく。

「ローズマリー様、可愛いです！ もう最高ですつ……」

あのいつもツンとしていて他人を寄せつけないオーラを漂わせている高飛車お姫様が目尻に涙を溜めながら快感に悶えていた。自分がそんな彼女を感じさせているんだと思うと胸の興奮はさらに高まり絶頂が迫ってくる。

「そ、そんなこと……あう、どうせお母様やお姉様の方が好きなんでしょうつ……わたくしなんて……ああん！」

可愛いと言われて明らかに嬉しそうに口元が緩んでいたのに、照れ隠しなのか急に母や姉にヤキモチをやき始めた。

確かにクリステイナはアキラが今まで出会った女性の中で一番の美人で、ステラが一番の美少女だった。しかしローズマリーの可愛さと彼女たちの魅力はタイプが異なる。

「そんなことないですつ……ローズマリー様が可愛いのは本当ですつ！ ローズマリー様のこと大好きです！」

「ほ、本当ですか？ ウソだったら承知しませんわよつ……わたくしだって、アキラのこと……す、す、好き……ですわつ……」

もう嬉しさを我慢できなくなったのか、王女は思いっきりギュッと抱きつきキスをしてきた。腰を突き上げると身体がバウンドして口が離れてしまうが、何度も何度も接吻をおねだりしてくる。

その普段とあまりに違う甘えん坊ぶりに、もう興奮は最高潮に達していた。

「うあ、すみませんっ……もう、出そうです！」

股間の奥から射精欲が湧き上がり全身を支配する。

「いいですわよ、このまま一緒にっ！ わ、わたくしも一緒に……あ、ああん、ひいあああっ！」

この体勢では確実に中出しになってしまおう。それなのに王女は腰を浮かせるどころか反対に離れまいと、ヒップを股間に擦りつけてくる。

そんな彼女の健気な姿に愛しさと独占欲が胸を満たした。

「で、出ます！ うあああっ!!」

力任せに腰を突き上げると同時に視界が白く弾ける。

ドビュッ！ ビュビュビュッ!! ドビュ、ビュルルッ、ビュブブッ!!

王女の膣に深々と刺さったペニスは子宮口に容赦なく精液を打ちつけた。

「ひいあっ……あ、ああっ……な、中に出てますわ！ わたくしもイクッ、あっ、ああっ、ダメッ、あはああ〜っ！」

射精を促すように膣肉は収縮を繰り返し、ローズマリーは金髪の巻き毛を振り乱しながら大きく身体を仰げ反らせて喘ぐ。

絶頂に達した王女の乳房からも大量のミルクが溢れた。



ブーブーと文句を言う娘たちだったが、淑女は動じた様子もなく笑顔で答えた。

「独り占めではありませんよ……ソッ、順番に可愛がってもらえばいいでしょう？ 待ちきれないなら、ほら……アキラに舐めてもらいなさい……」

「い、いえ……そういうことではなくて……」

「そうですわ、アキラに舐めてもらうなんて……」

以前にステラにはクンニをしたことがあり、それがきっかけで彼女はミルクが出るようになったのだが、王女たちには思わぬ提案だったのでろう。二人とも興味はあるが羞恥心の方が勝るらしく、またしても顔を見合わせながらモジモジとしている。

そうこうしているうちに、女王はメイドに視線を向けた。

「あら、せっかくなのに残念ね……それならシエリスはどうかしら？」

「アキラ様さえよろしければ、ぜひ……」

水を向けられた侍女は嬉しそうに微笑んだ。もちろん少年としても断る理由もない。

「僕はもちろんいいですけど……」

「それではシエリスも可愛がってくださいませ……でもその前に……ステラ様、ローズマリー様……お耳を……」

アキラが頷くとシエリスが近寄ってくるが、その途中で取り残されてしまい複雑な表情を浮かべていた王女たちに何やら耳打ちをしている。一言二言伝えると、メイドは少年の

前で一度深々とお辞儀をしてから顔の上に跨がってきた。

「それでは失礼いたします……」

「お、おおっ……」

ミルク風呂に入っている時もおっぱい枕をしていただけで、されているアキラの方は気持ちよかつたが彼女としては物足りなかつたのだろう。しゃがみ込んだ侍女の股間が目の前に迫ってくる。当然、濡れた陰毛も膣口もアナルも全て丸見えだった。

(うわっ……もうびしょ濡れだ……)

鼻先に大淫唇が迫ってくると今日は少しミルクの甘い香りがするが、それでもやはり蜜の甘酸っぱい香りが強くなる。この格好を見ると先日のことを思い出し、吸い寄せられるように舌を伸ばした。

「はンンっ！ あ、ああっ……アキラ様に……舐めていただけなんて……あんっ、はあんっ……し、幸せでございますっ……」

一度経験していることもあり、舌を尖らせワレメに挿し込みながら溢れてくる愛液を吸ると頭上で侍女の身体が大きくうねる。

頭を挟む太股がビクビクと震え、彼女が感じてくれているのが舌先からもダイレクトに伝わってきた。男心をくすぐられた少年はもっと感じて欲しい、もっと乱れさせたいと必死に舌で淫裂を舐め続ける。

「こ、こら！ 二人とも、悪戯はダメですよ……あ、ああん！」

クンニに夢中になりそうになっていると、急にクリステイナが喘ぎ声を上げる。何事かとシエリスの股の間から覗くと、女王の乳房に娘たちがしゃぶりついていた。

「ちゅ、ちゅう……わたくしたちもお手伝いしますから、早く交代してください……」

「わあ……お母様の胸、とつても柔らかいです……」

どうやら先ほどメイドはこのことをアドバイスしたようだ。女王が早く絶頂に達すればそれだけ早く順番が回ってくるかと教えられたのだろう。王女たちは二人がかりで手のひらには到底収まりきれない母親の重量感たつぷりの爆乳を揉んで吸って愛撫している。

「あ、はあん……うふふ、わらわのミルクの味はどうですか？ 懐かしいでしょう？」

しかし最初こそ悲鳴を上げて驚いていた女王だったが、何とか表情を引き締めながら娘たちの頭を優しく撫でていた。

大陸一の美女と噂されるクリステイナの乳房に娘たちが吸いつき、ミルクを搾っているのだ。この何とも艶かしい光景を見ているだけで一気に興奮は高まる。

「そんな昔のこと覚えていませんわっ……」

「そうですね。もう、子供じゃないんですからー」

懐かしげに微笑んでいる母親を見たステラとローズマリーは、恥ずかしそうに頬を赤くしながらもさらに乳責めを続ける。

「ン、ふう……ステラもマリーもっ……もういいでしょう……ンはっ、ああっ……そんな
に強く吸ったら、声が……」

娘たちの手前ということもあり、何でもないと顔をしていたクリステイナだったが
やはり両方の乳房を同時に吸われると相当感じてしまいうらしい。しかも今は膣内に活きの
いい若いペニスを咥え込んでいるせいで、肉感的な唇から甘い声がこぼれている。

「んぐっ、んぐっ……どうですか、お母様……気持ちいいですか？」

「ミ、ミルクが……ンぷっ……飲んでも飲んでも溢れてきますわ……」

早くイかせて交代してもらおうと意気込む王女たちが左右の乳房をそれぞれ両手で揉み
ながらミルクを吸っていると、クリステイナの喘ぎ声はどんどん大きくなっていく。

「あん、あはあんっ……本当に、困った子たちですよ……あんあっ！ 中でアキラのペニ
スがまた大きくなって……ンんっ、ミルクも止まらなくなってしまいわっ……」

娘二人と絡みあいながら乱れる淑女の痴態をもっと眺めていたかったが、不意に視界を
大きめのヒップでふさがれた。

「アキラ様……どうか、シエリスにもお情けを……」

クリステイナたちに見蕩れてつい舌の動きが止まってしまっていたせいで、シエリスが
物欲しげに腰を揺らしておねだりをしてくる。

再び甘酸っぱい蜜の香りを漂わせる淫裂が口元に押しつけられ、吸い寄せられるように

舌で濡れたワレメをなぞった。ミルクが混じったお湯のおかげか少し大淫唇は甘く、少年は美女の弱点をまるで犬のように舐めまくる。

「あ、あつ……いい、ですつ……お上手でございますつ……」

スレンダーなイメージが強いシエリスだが大人の女性らしくお尻から太股はムッチリと脂が乗っていて色っぽい。

先日彼女にクンニをした時のことを思い出し、今度は彼女にもっと気持ちよくなってもらおうと不思議なやる気が湧き上がってきた。指を使い大淫唇を広げ、さらに奥へと舌をねじ込むと侍女の喘ぎ声がいっそう大きくなる。

「んはああつ！　そ、そこつ……んつ、もつと……舐めてくださいませつ……」

「はあ、ああん！　シエリスったら気持ちよさそうな顔をして……あんっ♪　アキラのペニス……硬くて熱くつて、とつても美味しいですよつ……それに胸も、痺れて……あつ、ああ、もうダメ……変になってしまいそう！」

さらには腰の動き激しくし始めたクリスティナの嬌声も重なり、意識は下半身へと引き戻される。豊満なヒップが打ちつけられる小気味のいい音と粘膜同士が擦れあう淫らな水音が響き、女王の喘ぎ声が色味を増していく。

（この体勢の時の、クリスティナ様つて……は、激しすぎる……）

王国中が敬う聖母のような淑女が年下の少年に跨がり荒腰を使い快感を貪っている。初

体験の時のことが脳裏に浮かび、自分だけが知っている女王の乱れた姿に興奮はさらに高まっていった。

「ンはあ、そ、そこです……アキラ様、ああ、気持ちいいですつ……ンあああつ！」

思わず射精しそうになりながら必死に下半身に力を込め、トロトロと愛液が溢れてくるメイドの膣口を尖らせた舌先で穿る。頭をがっちりと挟んでいる太股が震え、その上では普段からは想像できないほど甘い声を上げながら身体をうねらせ悶えていた。

「……お母様もシエリスも……そ、そんなに大きな声を出して……」

「ちゅ、ちゅう……気持ちいいんですか……？」

女王が激しく上下に腰を揺らすたびに、たぶんたふんと揺れ弾む乳房を揉みながらミルクを搾っている娘たちが呆気に取られたような声を漏らしている。

「それは、ンっ……当たり前ですよ……二人ともミルクを吸われるのがどれだけ気持ちいいか知っているでしょう？ はあ、あンっ……そ、それに、アキラの元気なこれで奥を突かれたら、すぐに達してしまいますよっ……」

クリステイナも膣奥をえぐられ、愛娘たちに乳房を責められるというシチュエーションに興奮しているのか、長く艶やかな髪を振り乱しながら声を弾ませた。

グッチュ！ グッチュツ！ グチュグチュツ！

その腰使いはとて情熱的で、アキラが突き上げているというより女王が腰を打ちつけ

若い勃起ペニスを味わっているという方が正しいかもしれない。

(ううっ！ そんなに激しく動かれたら、出ちゃいますよっ……)

大洪水状態の膣壁が肉棒にしゃぶりつき、精液を搾り取るうと蠢いている。おかげで少年の腰も無意識のうちに揺らめき始め、膣奥に吸い込まれそうになる感覚を覚えた。

あまりにも気持ちよすぎてそのまま射精してしまいそうになり、少年は慌てて意識を股間から逸らそうと侍女の股間に舌を這わせる。さらにはワレメの先にあるコリコリとした秘芽を舌先で突つくとシェリスは甲高い悲鳴を上げた。

「あ、あひいっ！ そ、そこは、敏感ですから……優しく、ああっ、ひいんっ！」

膣口を舐められているだけのメイドがこれだけ乱れているのだから、膣奥を貫かれ両乳を責められている女王はさらに感じているに違いない。

「あはあっ……もう、ミルクが止まらないっ……娘にミルク吸われながら、いつてしまうなんて、どうしましょうっ……んんっ！」

クリスティナの喘ぎ声もどんどん大きくなり、淑女の絶頂が少しでも早くなるようにと赤子のように左右の乳房にそれぞれしゃぶりついていた王女たちも声を弾ませる。

「お母様っ、いったら交代してくださいねっ……」

「ダメですわよ、次はわたくしですわ！」

ステラとローズマリーはいつものように言い争いをしながらも、母親の乳房を揉む手は

休めてないようだ。女王は荒い呼吸を繰り返しながら何とか娘たちに言葉を返す。

「わ、分かっていきますよ……ああ、胸も気持ちいいっ！ アキラのペニスも中でまた大きくなって……はぁん、ああっ……いい、もっと激しくわらわを突き上げてえ！」

一段と股間の上に跨がっているクリステイナの腰振りが激しくなる。豊満なヒップが叩きつけられるピッチが速くなり、ペニスに絡みつく柔らかい膣肉が激しく収縮し射精欲がどんどんと湧き上がってきた。

「はんっ……あ、んっ！ わたしも、ああっ……感じてしまいますっ……いい、アキラ様の舌が気持ちいいですっ！」

アキラとクリステイナが互いに快感を高めあっているのと同時にシェリスもクンニを受けないがら自分で乳房を揉み搾り快感を貪っているらしく、腹部に温かいミルクの飛沫が飛び散る。

口元がベタベタになるほどメイドの膣からは止め処なく愛液が溢れ、全身は美女たちが放つ熱気と甘酸っぱい汗の香りに包まれ脳内が欲情一色に染まっていく。

「あん、ああっ……もう、ダメっ……イキそうなのっ……アキラも一緒に、一緒にイキましようっ……はぁあんっ！」

ズチャ、ズチャ、ズチャ、ズチャズチャッ！

女王は切羽の詰まった声を上げながらヒップを振りまくり、反射的に少年も下から激し

く腰を突き上げさらに快感は高まっていった。

「アキラ様、ソっ……そこ、そこです！ あはあつ、申し訳ありませんっ……わたしももうっ、頭が真っ白になってしまいましたっ……」

擦りつけられるワレメを舌で突っつき淫芽に吸いつくと、シエリスも腰を揺らめかせ悶えている。

「……ふ、二人ともすごいです……気持ちよさそう……」

「ソぐっ……お母様もシエリスもこんなにミルクを出して……」

あられもない嬌声に加えて王女たちの熱っぽいため息が聞こえた。ステラとローズマリが羨望の眼差しを向けるほどに美女たちは乱れ悶えているのだろう。

（ああっ！ もう、我慢できない！）

しかしアキラは直接その姿を見ることができないために妄想ばかりが加速する。ぶるんぶるんと揺れながらミルクを噴き出すクリステイナの爆乳にしゃぶりつく王女たち。そして股間を舐められて悶えている美人メイド。

「わらわも、もうダメっ……イクッ、イクラッ！ ああ、はあああ〜〜〜ッ！」

「ソああっ……胸が止まらないっ……わ、わたしもっ……ソひいつ!!」

見えていなくても股間には熱く潤んだ膣肉の感触が、舌尖には甘酸っぱい蜜の味が広がり全身を快感に支配され意識は白く弾けた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



Valkyrie



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille



<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!